３．史料論についての個別論考

今回の共同研究の締めくくりにあたり、以下、書き下ろしの論考を掲載する。いずれも、史料に関わる研究動向についての批判的論考であり、文献目録とともに、今後の研究の重要な礎となることが期待される。

津田論文は、カピトゥラリアに関する研究が提起している諸問題を総覧するものだが、そこで検討されているさまざまな論点が、現在の史料論研究の全般的傾向を顕著に示しているという点でも、特別な重要性を持つ。主要な論点としては、史料刊行や過去の研究自体の脱構築作業、史料現象の同時代的意味と事後的な学問的認識との間の緊張関係、史料の類型論、生成と機能のコンテクスト、伝来論、拘束力と価値などが挙げられよう。

花田論文は、従来十分な史料学的検討が行われてきたとは言い難い議事録を取り上げた希有な論考である。かつてボチエによってその重要性が指摘された、証書以外の文書資料類型に対する史料学、史料論的研究の必要性は、研究会においても何度も確認されてきたが、ここでは、都市議事録研究についての最新の研究動向が丁寧に検討されている。隆盛を極める中世末期都市史研究の資料基盤の拡大という意味でも注目される。

大宅論文は、都市当局による自身の文書管理の実態検討から、都市の制度と機能、さらにはその変遷を探るという斬新な試みである。中世の文書庫の実態を、現在の保管状況を決定した 19 世紀から順に遡る作業として、「アーカイブズの考古学」と呼ぶにふさわしい。中世中期から末期にかけて進行した、都市と王権の行財政上の連携を研究する予備作業として重要であるのはもちろん、史料の伝来と機能研究の一つのモデルを示している。

岡崎論文は、近年、大きな変容をさなかにあるアーカイブズ学について、その基本的性格と最近の変容、さらにはその背景となる諸問題を論じたものである。現代社会とアーカイブズ資料、およびその管理との関係をめぐる諸問題には、前近代社会の文書史料に関する史料論的研究を支える問題関心と関連するところが多いように思える。

清原論文は、現代アーカイブズ学最大のトピックである「レコード・コンティニュアム理論」について、これがはらむ現代的問題性を論じる。資料の存在や機能、価値について、根本的な再定義を企てるこの理論は、アーカイブズ領域を越える射程を有しており、中世史料論研究に対しても示唆するところが大きい。情報管理に関する最新の動向は、史料論研究の今後の展開を占う指針ともなりうると考え、報告書の掉尾に掲載した。